

淨瑠璃師匠とはどんな人か (一)

三 浦 名 門 二 (遺稿)

僕はまだ十四五才の時（明治十七八年頃）に就いてゐた師匠から「この師匠は藝もよかつたが、其の頃手紙の一本も書ける程の學者であつた。但し思ふ旨もあるので態と名を省く」産字引字の印可を受けた、其の免許料は金貳分（今の五十錢）であつた。その印可狀と云ふのは、小奉書二ツ折の紙へ、表にアイウエオの五十音を配當し、裏には産字引字の例を五ツ六ツ載せ、その中にも「笑ひ」に就て「アハハ、ハア」（開）「ムフ、ハ、」（合）（唇）等が書いてあつて、ソレで他言不許と云つた様な、嚴しい掟書があつた。（此の免許狀紛失して今は無し）その當時、許可狀に對して、一通り師匠の説明もあつたが、僕に聞く耳が無かつたか、師匠の説明が不充分であつたかその時は不得要領で畢つた。其の後二三年も過ぎて、文部省より小學入門と云ふ小兒用の教科書が発行せられた、此の小學入門を見ると、貳分出して、しかも敬々敷き印可を得た五十音の圖は、卷の初に麗々敷く出してあつた。これ

に依つて思ふに、義大夫に於ける口傳面授と云ふものは、秘事は睫毛で、多くは斯んな事であらう。（また外にも傳授事は澤山あるが）ソコでこの師匠は、こんな事でも傳授仕様とする師匠だから、其の頃の淨瑠璃連の中では、マア學者であつたか。それで先きから傳授しやうとする事の外は、なにを聞いても薩張り知らぬ。イヤ千に一ツや萬に一ツは知つて居る事があつても、それは皆悉く神秘視して、屁の様な事でも人に教ふる事を惜む。唯さへ無學な弟子をこんな調子で教へぬから、なほもつて文盲にして仕舞ふ。但しこれは僕が學者と認むる師匠の事で、其の他のかいなでの師匠連中に至つては手紙が書けぬ位でない、五行本さへ假名がなければ讀み得ぬ程の實に無學文盲な者ばかりで、何んぞ分らぬ事があつて、師匠に質問すると、その答辯は斯うだ一ツんな事を今から聞いても仕方が無い、語り物の二三十段も出来れば自然に分る事だから、マア精出して勉強したまへ」ぐらゐなもので、それをなほ手厳しく質問すると、不得要領な答辯を、な

ほ勿體らしくする。その答辯が道理にも時代にも、曲節にも錯誤してゐて、諸ひ難しと思ふ點もあるものから、なほ押返し其の錯誤々謬と思ふ點を指示して再問すると、師匠はムツとした顔で「私はそれ以上は知りませぬ、違つてゐましても私は師匠からその通り聞いて居ります。其の上の事がお調べになりたくば、外の學問のある師匠に就いてお聞きなさい、ナアに馬鹿な、理窟で義大夫は語れませんよ、ハイ左様なら」と云つた様な風で、斯う云ふ事を質問する人を仙人と符合して損斥して取り合はぬ。之れ「知らしむべからず依らしむ可し」と、云ふ政略でもなんでも無い、自體師匠からして一通りの事を知らぬのだから仕方がない。

斯んな風に、文盲な師匠が文盲な弟子を仕立てるから、甚だしきに至つては光秀が女だか、時姫が男だかさへ知らずに、親不孝な聲を出して唸つて居る。唸るもよろしい、獨りよがりの人困らせで無くば、敢て咎むる處はないが、こんな大夫さんと來たら、時も所も辨へず、メツタ矢鱈に唸りつける。其の功能は不思議に利いて、味噌が酢ツぱくなるのみならず、子供は泣き出す、病人は弱る、實にお長屋様のご迷惑はお察し申すに餘りありた。

義大夫と云ふものは、人を困らせたり、お長屋様にご迷惑をかける物ではない、自らも娛み、人をも樂しましむるのが本位で……。ソレが、斯く反對の結果を來すのは、藝の未熟なるは勿論だが、狂言の筋を知らぬからでもある。

音曲の事、技藝上の事はよき師に就いて練磨する事は勿論だが、狂言の筋を會得して腹が出来て居れば藝は下手でも「下手淨瑠璃鳴門で人を笑はせる」と、云つた様なカス

は喰はぬものである。

義大夫は今様の朗詠や長唄を唄ふのとは違ひ、其の人物の性情、即ち老幼男女喜怒哀樂、善惡邪正を語り分くるものなれば、自他の區別も、地、台詞の境界も無く、ノツベラ棒の根深節では、聲がよくても節廻しがうまくても、面白くないは無論の事だ、況んや先天的の惡聲に於て乎だ。「理窟で義大夫は語れぬ」と、云つたは千古の格言で、動かす事は出来ないが、サテ理窟なしの義大夫も亦聞くに足らぬもの、否！聞くに堪へられぬものである。

「謠秘傳書」に「聲を忘れて曲を知れ」と云ふ事が書いてあるが、僕は百尺竿頭一步を進めて「聲を忘れ、曲を忘れて筋を知れ」と云はんとす、蓋しこれは餘り極端な言かも知れぬ。

從來の義大夫の教育法は、曲育ばかりで學育がない（妙な熟字だ）だから、光秀が惡人だか善人だか、時姫が夫婦だか貞女だか知らずに居る。ソレを知らずに語るのだから腹が出来ぬ、腹の無い義大夫は、聲がよくても節廻しが上手でも、長唄と一般、面白味のないのは云ふに及ばぬ。これは教育法が曲育ばかりに傾いた結果だ、と云つて、團十郎の活歴（劇）風にかぶれ三浦之助を木村長門守、北條時政を徳川家康、大星由良之助を大石藏之助など狂言を事實に當て簀めんとしたハイカラ的の改良騒ぎは、素より執るに足らぬ淺薄で、事實は事實、狂言は狂言と兩様に筋を吞み込んで居らねばならぬ。

嘉永安政時代は、小學制度の行はれぬ時代だから、こんな時代に學育を獎勵しやうとしても出来ぬ話で、ソレで盲目連には盲目相應の曲育だけを獎勵したものに見える、實に之は止むを得ざるに出たのであらう。